「日陰者に照る月」について

——「偉大な神ブラウン」と比較して——

大 川 哲 男*

Some Considerations on 'A Moon for the Misbegotten'

——Compared with 'The Great God Brown'——

Tetsuo Ohkawa

はじめに

A Moon for the Misbegotten（以後 A Moon と略す）は，オニール後期の作品で1943年に完成した．The Iceman Cometh（1939年）Long Day's Journey into Night（1941年）の次に書かれたものである．The Great God Brown（以後 The Great と略す）は，1925年に書かれた．この2つの作品の間には18年という長い年月があるけれども，それにもかかわらず大きな類似点がある．それはどちらの作品もオニールの兄ジェイミー・オニールを扱っているということである．彼は1923年，酒のためにこの世を去っている．オニールはこの兄の死について次のように述べている．

> He and I were terribly close to each other, but after my mother's death in 1922 he gave up all hold on life and simply wanted to die as soon as possible.[1)]

The Great におけるダイオンは，母の死後，神を求めるし，A Moon におけるジムは，母の死後，救いを求めてジョージーの許にやってくる．どちらの作品にも母の死によって大きな挫折感を持った人間（ジェイミー）が中心的人物として登場してくる．しかし2つの作品には違った面もある．次にそれを大まかにあげてみる．

①A Moon がリアリスティックな作品なのに対して，The Great は a drama of souls（魂のドラマ）と言われるように，人間の本質的な面を追求した作品であり，そのため抽象的な作品になっている．特にこの劇では，人間の二重性を仮面を利用して表わしている．

②The Great の場面は，埠頭，アパートの一室，事務所，書斎，製図室，パーラーといろいろ変わるのに対して，A Moonの場面は，農場の中のホーガンの家のみである．

③The Great の時間は，プロローグが6月中旬の月夜，第一幕は7年後のある日，第二幕はその7年後のある日，第三幕はその一か月後，第四幕は数週間後，エピローグは再び6月中旬の月夜というように変化するが，A Moon は，1923年9月初旬のある1日を設定にしている．

第一章　2つの劇における Moon の意味

A Moon の方はその題が示すように月が重要な意味を持っているし，The Great の方はプロローグとエピローグが月夜を背景としている．A Moon では，重要な場面であるジョージーとジムのデートが月夜に行なわれる．彼女自身が言うように，このデートの中で愛による奇跡がおこるのであるが，そんな奇跡の背景として月夜は最適である．Long Day's Journey Into Night におけるエドマンドが自然との一体感を経験するのも月夜であった．Scheibler は月夜が神秘的な場面を作り出していると述べている．[2)]この月に対してジョージーとジムは最初違った見方をしている．ジョージーが月夜を肯定的に見ているのに対してジムは否定的に見ている．

> Nuts for the moon! I'd rather have one light on Broadway than all the moons since Rameses was pup.　(p. 84)

彼が月夜を嫌うのは，それが過去を思い出させるからだ

＊宇部工業高等専門学校英語教室

ということが1つある.

I don't like your damned moon, Josie.
It's an ad for the past. (p. 99)

月夜によって彼は感傷的になり，母親のことを思い出してしまう．だから彼には酒と笑いが必要となる．それらは彼を本質的に救ってはくれないけれども，一時的に悲しみを忘れさせてくれるという効果がある．現実からの逃避 (withdrawal) である．Scheibler はジムが幻想 (vision) より錯覚 (illusion) を好んでいると言う．[3]幻想はつかの間のことであるが，苦しい現実を生きていく力を与えてくれるというのである．ジョージーはそういう幻想を大事にしていこうとする．

The Great のマーガレットは月に向かって愛の告白をしている．月は彼女にとってダイオンを意味しているのである．

Dion is the moon and I'm the sea. I want to feel the moon kissing the sea. I want Dion to leave the sky to me. (p. 227)

「月」が「海」に映る様はまるで海が月を包みこんでいるかのようであるが、実は月は海から遠く離れて浮かんでいるのである．同様にマーガレットとダイオンは結局一体感を持つことなくすれちがいに終ってしまう．ダイオンが死んだ後のエピローグにおいてもそれは変わらない．それに対して A Moon の中でのジョージーとジムは月夜の中で最後に一体感を持つことに成功する．オニールは次に示す Lover's Moon の伝説をこの劇の中で利用していると思われる．

A Lover's moon soars clear and bright,
Guiding true love throughout the night.

第二章 The Language of Kinship

Manheim はオニール劇 (特に後期) の特徴としてその human kinship を挙げ，A Moon においては the kinship of everyday conversation と the deeper kinship の2種類があると述べている．[4]この章では，それぞれの登場人物の kinship を扱う．

(1)ジョージーとマイクの対話

彼らの会話でこの劇が始まる．マイクはジョージーの弟で父（ホーガン）や姉と違って熱心なカトリック教徒であり，品行方正な人間として通っている．彼は荒れはてた農場で苛酷な父にこきつかわれることに嫌気がさし，農場から逃げ出そうとしている．彼の兄達(トマスとジョン)はとっくに逃げ出し，トマスは警官に，ジョンはバーの経営者になっている．彼らの会話の観客に与える効果として Scheibler は次の点をあげている．[5]すなわちマイクのような普通の人々である観客は，彼が農場から去っていくために自分たちも現実の生活から離れてジョージー達に同一化 (identification) するというのである．

品行方正で通っているマイクらしく，彼のせりふには汚ない表現は見られない．ただ父親のことを the old hog (p. 2) と言ったりしてジョージーからなぐられる．マイクとジョージーの間には，彼女と父親との間ほどの kinship がないことがわかる．なぜならジョージーとホーガンは汚ない言葉でお互い呼びあっているからだ．マイクと較べてジョージーの方には女らしくない汚ない表現が目立つ．例えば Give them a boot in the tail for me. (私の代わりにあいつらのけつを一発けってやれ) (p. 5) というような表現である．こういった言葉が使えるのも彼らの間に姉と弟という kinship があるからだが，それはかなり表面的なものと言える．Manheim の言う the kinship of everyday conversation の一例である．

(2)ハーダーとホーガン，ジョージーの対話

ハーダーはホーガンの農場の隣りに大きな土地を持つ大石油会社の社長である．彼は自分の土地のこわれたさく（実はホーガンがわざとこわした）を通ってホーガンの飼っているブタが入りこみ，ice pond（氷を作るための池）に入って水あびをするので文句を言うためにホーガンの所へやってくる．多くの批評家はこのシーンがなぜこの劇に出てくるのか，その意味について疑問を投げかけてきた．ジムが忠告するように権力者であるハーダーとけんかをすることは自分にとって不利であり，現に怒ったハーダーはジムに1万ドルで農場を売るように迫ったりする．Scheibler はマイクとジョージーの会話と同様にこのシーンも観客の劇中人物に対する同一化を意図していると述べているが，むしろここではジムとジョージー，ホーガンの住む世界が違うことを暗示しているように思われる．彼らは権力者に対してドンキホーテの如く向こうみずな闘いをしかけることによって生の満足感を得たのであり，闘うことなくしてはそれは得られないものである．それに対してジョージーの寝室にかくれて笑って

いるだけのジムにはそれだけの勇気がないのである．ジョージー達のたくましさとジムの弱さが対照的に表現されている．ハーダーとジョージー達の会話には当然 kinship はぜんぜん感じられない．ホーガン達は一方的にどなったり (jarring shouts), なれなれしく毒舌をぶったり (low, confidential vituperation) してハーダーを翻弄し，彼を追いだしてしまう．どたばた調の喜劇であり，ラストの静けさに対して対照的である．

(3)ジョージーとホーガンの対話

彼らの間にはマイクとジョージーの間以上の kinship が見られる．その特徴の1つはお互いを汚ない言葉で呼び合うことである．最初の会話に特にその特徴が出てくる．マイクを逃がしたジョージーをホーガンが責める場面．

Hogan——Where is he? Is he hiding in the house? I'll wipe the floors with him, the lazy bastard! (Turning his anger against her) Haven't you a tongue in your head, you great slut you?

Josie ——Don't be calling me names, you bad-tempered old hornet, or maybe I'll lose my temper, too.

Hogan: To hell with your temper, you overgrown cow!

Josie: I'd rather be a cow than an ugly little buck goat. (p. 8)

この他にもホーガンはジョージーに対して the great soft fool (p. 9), you lazy cow (p. 22), a prize dunce (p. 51), a poor sheep (p. 52), the dirty bastard (p. 62) などと呼び，ジョージーはホーガンに対して a wicked old tick (p. 11), you old goat (p. 14), you bad tempered runt (p. 22), you sly miser (p. 23), you scheming old thief (p. 63) などと呼ぶ．この父と娘のいい合いは二人の仲が良いことを表わしていることは，最後に二人が和解したシーンでわかる．

Josie ——, you bad-tempered old tick. Let's go in the house and I'll get your damned breakfast.

Hogan:Now you're talking. (p. 115)

第2の特徴は，その会話のリズムの変化である．すなわち反感と愛情が交互に表われるのである．特にホーガンの方にそれが見られる．マイクを逃がしたジョージーに対して怒ったホーガンであるが，彼女が使いものにならない馬を治療して高く売りつけた話をすると，彼は怒りを忘れて彼女をほめたりする．そしてジョージーが彼に侮辱的なことを言うと再び怒るが，彼女がほうきを持っておどすと彼は降参して再び彼女のたくましさをほめる．Manheim の言うこういった a rhythm of alternating hostility and affection[6]は，初期のオニールの作品に見られたものである．

The Great においてはそういった kinship が見られない．例えば次はブラウンとダイオンの会話．

Billy: (always as if he hadn't listened to what the other said) Say, let's you and me room together at college——

Dion: Billy wants to remain by her side!

(p. 228)

2人の会話は全くかみ合わず，それぞれが勝手に話している印象を受ける．この劇には独白が多いのもそんな特徴を裏づけている．この頃のオニールは人間同士の関係の中に生きる意味を見い出そうとするよりも，神にそれを求めようとしていた．だからこの劇では神に対する言葉がしばしば見られる．次はブラウンの死に際してのせりふである．

Brown——Who art! Who art! (Suddenly——with ecstasy) I know! I have found Him! I hear Him speak! (p. 278)

ホーガンはジョージーとジムを結婚させようというたくらみを持っている．そういう秘密を持っているので彼らの kinship もまだまだ表面的なものにとどまっているが，しかしジムが去った後，ホーガンが娘の父親に対する不信（お金のためにジムとの結婚をたくらんだと思っていた）に対して次のように弁明する．

I did see it was the last chance——the only one left to bring the two of you to stop your damned pretending, and face the truth that you loved each other. I wanted you to find happiness——

(p. 113)

娘とジムを救うためにしたことだという彼の言葉に感動した彼女は，マイクと同じように農場を逃げ出そうという決心を変え，再び父親とこの農場で暮らしていく気持ちになる．ここには父と娘の深い kinship が出ている．

ホーガンの言葉や行動を見ていると，彼がオニールの父ジェームズ・オニールをモデルにしているのではないかと思われてくる．その理由の第1は汚ない言葉で相手を呼ぶ点である．ジョージーに対する言葉については前

に述べたが，他には息子のマイクに対して the lazy bastard (p. 8), the cowardly lump (p. 9), that lousy altar boy (p. 10), that dopey gander (p. 10), that pious lump. (p. 11) などと呼び，ハーダーに対しては，me honey (p. 38), the poor loon (p. 39), me Honey Boy (p. 39), you bloody tyrant (p. 40), me little millionaire (p. 40) などと言ってからかう．ジムに対しては the lying bastard (p. 51), a dirty lying skunk of a treacherous bastard (p. 56) と呼ぶ．彼とマイクの場合は他と違って面と向かって言うのではなく，ジョージーに対して間接的に言うのである．第2は，彼がけちだとみんなから見られている点である．ジムがジョージーの飲む酒を地面にたたき落とす場面があるが，その時のジムのせりふ．

He loves to play tighwad, but the people he likes know better. H'd give them his shirt. He's a grand old scout, Josie. (p. 80)

これとは対照的に，ジムは自分の父親のことをひどくけなして，次のように言う．

You ought to be glad you've got him for a father. Mine was an old bastard. (p. 83)

金持ちなのにけちな父親に対して，貧乏でも自分のシャツを人にやりかねないホーガンは立派な人間ということになる．ジムは理想の父親像をホーガンの中に見ている．第3は2人ともアイルランド移民であること．第4は2人とも教会に行かないという点．第5はジムがホーガンを父親のように思っているのと同様に，ホーガンもジムを息子のように思っている点である．

I'd come to love him like a son——a real son of my heart!——to take the place of that jackass, Mike, and me two other jackasses. (p. 56)

これらの点は Long Day's Journey の中に出てくるティローンと共通している．ホーガンはその劇の中に話題として出てくるショーネシーにあたるが，その話題はジェイミー（ジム）ではなくエドマンドの口から出てくる．ジェームズ・オニールの小作人に実際こういう豚飼いがおり，隣りの地主に因縁をつけたらしい．それを利用しているわけであるが，ジムがホーガンの農場へやってくるのは，ジョージーに会う目的が主であるが，父親のようなホーガンに会うことも目的だったと思われる．

(4) ジョージーとジムの対話

夜の9時にジョージーに会いに来ると言っていたジムは11時になってもやって来ない．The Iceman Cometh におけるヒッキーもホープの酒場に遅れてやって来る．ヒッキーはマタイ伝に出てくるキリスト（花むこ）のゆがめられたものだという説があるけれど，[7] ジムにもそのイメージがある．まず第一に真夜中に遅れてやってくる点である．また自分が大女だという劣等感を持ち，ふしだらな女のふりをしていたジョージーに，仮面を脱ぎ，与える喜こびを教えた点が第二である．それは彼の愛によって可能となったのである．キリストのように人類を救いはしないけれど．第三にジョージーとジムの結婚が話題となっている点で，ジムと花むこ（キリスト）のイメージが重なる．結局彼らは別れてしまうけれど，精神的には強く結ばれる．

最初彼らの間には心理的なすれちがいが見られる．ジムが農場を売ると思いこんでいるジョージーは，彼をベッドにつれこもうという下心を持っている．ところがジムは今までのような売春婦とのセックスを嫌悪し，精神的な愛を求めてやってきた．だからジョージーが売春婦のように酒を飲もうとすると，そのコップをたたき落としたりする．だが最後にはそのすれちがいも克服し，二人は精神的な一体感を味わう．

ところで，この劇を書く過程でオニールはタイトルを3回変えているという．最初は'The Man of Other Days'で，この中ではジェイミー（ジム）の自己告白が主題となっていた．2回目は'The Moon Bore Twins'で，この中ではジョージーとジムの関係が主題となっていたという．そして最後のタイトルとなったのである．[8] 2回目のタイトルはジョージーが作者オニールの分身 (alter ego) であることを示してはいないかと Floyd は言っている．twins というのは兄弟を連想させる語であるからで，兄の病気の見舞いにも行かなかったオニールの悔恨の気持ちがジョージーによってジェイミーに平和な死を迎えさせてやるという行動に表われているというのである．しかし，この語には「似た物同志」という意味があるように，ジョージーとジムはお互いに似た点がある．次はジムのせりふ．

Because you and I belong to the same club. We can kid the world but we can't fool ourselves, like most people, no matter what we do——nor escape ourselves no matter where we run away. (p. 87)

ジムはジョージーがあばずれ女 (slut) のように振るまうのは見せかけ (pretence) であって，本当は心のやさしい

人間なのだと言う．そんな彼の真情にほだされて，彼女はついに自分が処女であることを告白する．そして愛する男性と肉体的にも結ばれたいという自然な気持ちから，彼女はジムをベッドに誘う．すると彼は突然今までの紳士的な態度をがらっと変え，彼女を売春婦のように扱う．Kiddo, kid, Bright Eyes, Baby Doll (p. 89) と彼女に呼びかけたり，hit the hay（寝る）といった俗語を使ったり，前後のせりふと較べて大きな変化がある．彼の中では肉体と愛が別々となっており，ジョージーの自然な要求にも応じることができない．売春婦との肉体関係におぼれていたジムはその愛もゆがめられたものとなっている．このジョージーに対する悔辱によって彼らの間には最大の危機が訪れる．この危機を救ったのは何であったか．それはジョージーの愛であった．これがなかったら二人は憎しみの中で永遠に別れなければならなかったろう．ジョージーは肉体の愛を超えて，ジムのために母親の代わりをしようとする．

Now lay your head on my breast——the way you said you wanted to do——Forgive my selfishness, thinking only of myself. (p. 92)

ここには利己的な自分を捨て与える喜びを知ったジョージーの美しい姿が表われている．しかしその愛を与える対象であるジムはもうすでに精神的に死んでいるのである．彼の馬に関する告白の中にそれが表われている．1935年から1942年にわたって書かれた A Touch of the Poet の中で馬は物体と精神の一致 (unity) をシンボライズしていた．このジムの告白はもはや彼の心の中では調和がとれていないことを暗示している．オニールの手紙からもわかるように，それは母の死による喪失感から来ている．父が死に，弟（ユージン・オニール）は結婚して自分の生活を持っている．母には自分ひとりしかいないという気持ちが彼にある種の充実感を与えていたことは確かである．しかし母の死によってそうした充実感はなくなり，とりのこされたという気持ちが残るだけである．彼女の臨終の場面の描写には，せりふの変化がはっきり見られる．

Practically a stranger. To whom I was a stranger. Cold and indifferent. Not worried about me any more. Free at last. Free from worry. From pain. From me. (p. 96)

このようにこま切れのせりふとなっている．彼のこの描写には The Great におけるダイオンの母のそれとの類似点がある．

The last time I looked, her purity had forgotten me, she was stainless and imperishable, and I knew my sobs were ugly and meaningless to her virginity; (p. 242)

母親が自分から遠く離れてしまったという気持ちを持った彼らは自分の涙を空虚なものと感じる．ジムにいたっては母の葬式にも出ない．心の支えを失ったジムは母の遺体を乗せたニューヨーク行きの列車の中でも，その空虚な心を充たそうと毎晩売春婦 (a blonde pig) と寝る．それは自分を残して死んでしまった母への復讐 (revenge) でもあると彼は告白する．この劇においては3つの復讐が出てくる．第一はホーガンにとっちめられたハーダーが農場を買いとろうとするそれであり，第二はジョージーのジムに対するそれである．農場を売ることにジムが同意したというホーガンのうそにのせられて，ジョージーは彼への復讐を誓う．

A hell of a revenge! I'll have a better one than that on him——or I'll try to! (p. 59)

しかしジムの愛の前に彼女の復讐心は消えさる．そして第三にジムの母親に対するそれである．復讐心によって生じるものは救いではなくまた新しい罪の意識である．しかしその罪は結局ジョージーによって救われる．2人はお互いの力で復讐心をのり超えていく．ジムがジョージーの胸に顔をうずめるシーンはこの劇において時間的にも長く，また重要な部分を占めているが，The Great におけるシベルもまた劇中でジョージーと同じような役目をしている．彼女とジョージーの描写を較べてみると，ジョージーの方がより具体的に身体の特徴が表現されている．シベルが Mother Earth（母なる大地）を象徴していることは劇中にも書かれているし，それだけ抽象的な人物となっている．しかしその身体上の特徴においてただ1つ大きな共通点がある．それは2人とも豊かな胸と腰を持っていることである．ジムはその胸に顔をうずめるのであり，それはまさに母と子のイメージ（多くの批評家はキリストの死体を抱いて嘆き悲しむ聖母マリア，すなわちピエタのイメージと重なると言っている）であるが，一方ダイオンはシベルの足許にひざまずいてひざの上に頭をのせるだけである．Mother Earth として崇める姿勢がそこにある．もう1つ大きな共通点は2人とも相手に対して与える存在であるということである．ジョージーはジムに死を前にしてのひとときの平和を与え，シベルはダイオンに死ぬ力を与えたという点である．

You've given me strength to die. (p. 246)

というダイオンのせりふがそれを示している．またジョージーとジムの間にセックスの関係がなかったのと同様にダイオンとシベルの間にもそれがない．

次にあげるシベルとジョージーのそれぞれがダイオン，ジムに対して言ったせりふには大きな類似点がある．

Cybel : (like an idol again) What's the good of bearing children! What's the use of giving birth to death? (p. 247)

これはダイオンがシベルから去って行く時に彼女の言ったせりふである．すでにダイオンが死人となっていることを暗示している．(実際この後，彼はブラウンの書斎で死んでしまう)

Josie : A virgin who bears a dead child in the night, and the dawn finds her still a virgin. (p. 103)

彼女のせりふもジムが既に死人であることを暗示している．彼はこの劇の中で死にはしないが，自殺するだろうということが彼女によってほのめかされている．

ダイオンとジムを較べてみても，モデルが同一（ジェイミー）であるだけに，多くの共通点が見られる．シベル，ジョージーとの関係もそうであるが，まず第一に彼らのメフィストフェレスのような顔つきが共通している．もっともダイオンのそれは2つの面のうちの1つであるが．また前に述べたように2人は母親の死によって大きな影響を受けている．ただダイオンの場合は，母に代わる物として神を求める．だから彼のせりふには O God(p. 227) Old Beard(p. 227) O Lord(p. 246) Our Father(p. 257) などの神に対する呼びかけがしばしば出てくる．だからシベルの愛を拒否する．彼女に対する別れの言葉がそれを表わしている．

Go to the devil, you sentimental old pig!

See you tomorrow! (p. 247)

朝になって目をさましたジムは初め昨夜の出来事を思い出さない．ホーガンのバーボンを見て思い出した後も知らないふりをしようとするが，ジョージーの真心に触れついに別れぎわ告白して走り去っていく．感動的な場面である．

I'm a liar! I'm a louse! Forgive me, Josie.

I do remember! I'm glad I remember!

I'll never forget your love! (p. 113)

ダイオンと反対に彼はジョージーの愛を受け入れることによって救われるのである．

おわりに

オニール自身が一番気に入っている劇は The Great であるという．それはなぜであろうか．その自伝的要素だとすれば Long Day's Journey, A Moon なども同様のはずである．とすればその大きな理由は The Great の抽象的な面にありそうである．すなわちブラウンがダイオンの仮面をつけて人格が変わり，そして最後に彼が警官に撃たれて死ぬ時，シベルが警官に言ったせりふ Man! (p. 278) に集約されていないだろうか．悲劇的存在としての人間を追求した点がオニールの気に入ったのではないだろうか．解決することで終わるのではなく，悲劇その物を追求していく，人間の存在その物を追求していった点である．その意味でオニールは正に闘う作家だと言えるであろう．A Moon におけるエピローグは静かであり，ジムの死も自然なものと受けとれる．しかしダイオンはブラウンに許しを求めながら死に，ブラウンは銃で撃たれて死んでしまう．2人の死はそれぞれジムの死と対照的に苦しみを伴っている．ダイオンがブラウンに対して持つ罪の意識はその根拠がはっきりしない．本質を追求しすぎてまわりがぼやけてしまった印象を受ける．A Moon においてはジムの罪の告白とジョージーによる救いが中心となっている．全体としてセンチメンタルとも言える印象を受ける．この論文では主人公達の Kinship を中心として扱った．故にこの要素が薄い The Great の方はほんの参考程度になってしまった．なおテキストとして A Moon の方は Vintage Books を，The Great の方は Selected Plays of Eugene O'Neill, Random House の中から使用した．

Notes

1) Louis Sheaffer, O'Neill : Son and Artist (Little, Brown And Company. Boston. Toronto) p. 88
2) Rolf Scheibler, The Late Plays of Eugene O'Neill (Francke Verlag Bern) p. 69
3) Scheibler, op. cit., p. 83
4) Michael Manheim, Eugene O'Neill's New Language of Kinship. (Syracuse University Press 1982) p. 198
5) Scheibler, op. cit., P. 59
6) Manheim, op. cit., p. 8

7) Ed. by John Henry Raleigh, Twentieth Century Interpretations of The Iceman Cometh (Prentice-Hall, Inc., Englewood Cliffs, N. J.), p. 81
8) Ed. by Virginia Floyd, Eugene O'Neill at Work (Frederick Ungar Publishing Co., New York) pp. 372-375

(昭和58年9月16日受理)